Tamaki Numakura: Life and Achievements: Postwar fural society of Tohoku through the eyes of "Yonekawa newspaper"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 和賀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24116

沼倉たまきの生涯と業績

――「米川新聞」（1951～1965）からみえる戦後東北の農村社会――

佐　藤　和賀子

はじめに

「米川新聞」（以下、括弧を付けずに記す）は1951年（昭和26）に沼倉たまき（環）を編集発行人として、宮城県登米郡米川村の有志によって創刊されたガリ版刷のＢ４判両面刷２頁の新聞である。月３回発行され、1965年（昭和40）に500号をもって終刊になった。

米川新聞を創刊した時、沼倉たまきは米川村議会の議員であった。しかし、米川新聞は沼倉たまき個人の政治活動のための新聞ではなく、また、市町村の広報紙に代わる新聞でもなく、地域の発展向上について、地域の人々と一緒に考え語り合う新聞を目指していた。

旧米川村（現在の宮城県登米市東和町米川）は宮城県と岩手県の県境にある面積73.65平方キロの村であった。1952年（昭和27）当時は人口5,800人程[1]、農耕地が少ない山村で、「零細農が大部分で純然たる農業経営のみでは成り立たない村」「産業の根幹をなすものは煙草・養蚕・製炭」[2]と、いわれた地域である。

米川地域の行政上の変遷は次の通りである。1888年（明治21）４月25日に市制・町村制が公布され、1889年（明治22）４月１日に狼河原村と鱒淵村の合併で誕生したのが米川村である。戦後は1953年（昭和28）９月１日の町村合併促進法公布によって、1956年（昭和31）９月30日に米川村と錦織村が合併して日高村になった（**資料１**）。しかし、翌年５月１日には日高村と米谷町の合併が成立して東和町となり[3]、その後は平成の大合併により2005年（平成17）４月１日に東和町を含む宮城県登米郡８町（迫町、登米町、南方町、東和町、中田町、豊里町、米山町、石越町）と宮城県本吉郡津山町が合併して登米市となり、現在に至っている。

資料１　宮城県登米郡町村合併現況図
（昭和31年10月１日現在）
出典：『昭和三十一年宮城県市町村勢要覧』

本稿は米川新聞の記事を手がかりに、次の３点について考察する。

１．米川新聞の教会広報紙としての役割
２．昭和30年代の町村合併の経緯
３．米川中学校卒業生の集団就職の動向

この３点に焦点を与えるのは次の理由による。１については、米川村の宗教的特殊性と米川新聞の関係がこれまで注目されてきたからである。米川村の旧狼河原村地区は江戸時代にキリシタンの殉教があった地である[4]。米川村では、昭和20年代後半にキリシタン殉教に関する遺跡の発見や調査が進み、キリスト教への関心が急激に高まるなかで、1955年（昭和30）に308人の集団洗礼がおこなわれた[5]。そのような時期に米川新聞が創刊されたので、米川新聞

にはキリスト教関連記事が掲載された。そのため、米川新聞の「間接の布教」[6]や「布教の補助的なメディア」[7]としての役割が指摘されている。米川カトリック教会が刊行した『身も魂も――米川カトリック教会創立25周年記念誌』には、米川新聞に掲載されたキリスト教関連記事が資料として抄録されている。本稿では米川新聞の個々の記事を検討し、米川新聞とカトリック布教の関係を改めて考察したい。

2、3について考察するのは、戦後の国政や経済の大きな変動が、東北の小村である米川村の議会や人々の暮らしに如何に影響しているのか、という視点からである。米川新聞が長期間にわたり地域新聞ならではの情報網を駆使して丁寧に報道しているのが、昭和30年代の町村合併の経緯と、米川中学校卒業生の集団就職の動向である。

以上の3点を検討する前に、沼倉たまきの生涯と業績について紹介する。

1．米川新聞を創刊した沼倉たまきの生涯

沼倉たまきの実家沼倉家は狼河原村の中で「町」とよばれる街道沿いに、有美堂という名前の医院を営んでいた。たまきの高祖父沼倉隆教（寛政元年～嘉永2年）、曽祖父沼倉隆庸（文化4年～明治28年）、祖父沼倉文十郎（文政12年～明治28年）、父沼倉精一郎（嘉永6年～昭和4年）と代々続く医者の家であった[8]。

なかでも曽祖父沼倉隆庸は『登米郡米川村誌』で紹介されている人物である。隆教の婿養子になった隆庸は長崎遊学中に、養父隆教が亡くなると狼河原村に戻り医家を継ぎ、そのかたわら寺子屋を開き、1895年（明治28）に89歳で死去した。

沼倉たまきは1896年（明治29）5月9日に沼倉精一郎と妻りんの次女として、宮城県登米郡米川村で出生した。たまきの姉文子は乳児の時に亡くなり、戸籍に記載は無い。精一郎・りん夫妻は、1891年（明治24）に宮城県牡鹿郡石巻町の安田家から12歳の男子を養子にむかえ、その後たまきが誕生したので、養子沼倉昌平はたまきの義兄になる。

たまきは1909年（明治42）4月、仙台市の東華高等女学校に入学した。米川村初の女学校進学者であった。1914年（大正3）3月に宮城県女子師範学校第二部を卒業し、同年4月に宮城県本吉郡松岩小学校に赴任した。1年後の1915年（大正4）に実家近くの登米郡米川村小学校に転勤した。1917年（大正6）には、朝鮮総督府に勤務していた義兄の沼倉昌平を頼り、たまきは朝鮮にわたり［**写真1**］、朝鮮全羅南道羅州小学校に勤務した。母りんも娘たまきに同行した。

たまきは1919年（大正8）、義兄昌平と同じ職場の群馬県出身の茂木文雄と婿養子縁組の結婚をした。結婚式はたまきの実家のある米川村でおこなわれた。結婚後、朝鮮に戻り、京城の三坂小学校に勤務した［**写真2**］。たまきの晩年に養女になる高田満帆は三坂小学校時代の教え子である。結婚の翌年1920年（大正9）6月24日、夫文雄が26歳で死去した。その時、たまきは身重であった。同年9月25日に長男隆文が誕生した。

父精一郎が病気になると、たまきは米川村に呼び戻され、1927年（昭和2）4月から米川村小学校に再び勤務した。1929年（昭和4）2月27日に父が亡くなると、朝鮮に戻り、平壌の若松小学校、南山女子普通学校、京城の鐘路小学校、青葉小学校に勤務した。母りんは1941年（昭

写真1　京城にて（大正6年頃）

写真２　京城三坂小学校（大正９年頃）　左端　沼倉たまき

和16）に死去した。京城大学在学中の一人息子の隆文が満州に出征中に結核を患い、入退院を繰り返し、1943年（昭和18）に23歳で死去した。

息子隆文を亡くした後、すぐに京城の青葉小学校六年生の担任教師になった。その時の教え子が50年前の記憶をたどり、沼倉たまきの思い出を京城青葉会会誌『青葉』に「先生は大柄な方で、何時も紺色の上着とズボン、注意をされる時、キッと口を結ばれるあのお顔はちょっと怖かったけれど、何時も大きく包み込む様な優しさがありました」「先生は教え子の一人一人に光を当て、あの教室の中ではみんなが主役でした」と綴っている[9]。

1945年（昭和20）12月に、たまきは教え子の高田満帆に伴われ引揚げ船に乗り、母りん、夫文雄、息子隆文の遺骨とともに帰国した。

米川村に落ち着くと、たまきは1946年（昭和21）に米川小学校に勤務した。翌年1947年（昭和22）４月から、校長及川哲夫に勧められ、新制米川中学校の教諭になった。同年４月30日には戦後初の町村議会議員選挙があり、たまきは地域住民から推されて在職のまま米川村の議会議員に立候補した。当時は現役の教員が議員になることが可能であった。女性が公民権を得た最初の町村会議員選挙で宮城県内では12人の女性議員が誕生し、沼倉たまきもその一人になった。1951年（昭和26）３月、米川中学校を退職し教職を退いた。

米川婦人会が1947年（昭和22）に結成されると、沼倉たまきは初代会長を1949年（昭和24）までつとめている。戦後数年の間に結成された地域婦人会の中には、戦前の愛国婦人会や国防婦人会の会長が、戦後もそのまま会長や役員を務める例が少なからずある[10]。しかし、沼倉たまきには戦前の婦人会活動の経験は無く、そのことが幸いして、戦前のしがらみのない新しい婦人会を作ったことを、後述の米川村文化協会の活動から推測できる。

かくて1947年（昭和22）には、沼倉たまきは婦人会会長、中学校教諭、村議会議員の３つの肩書をもつことになった。このような時に、たまきを訪ねて来たのが、教え子の高田満帆であった。

終戦後、高田満帆は父の実家のある山口県玖珂郡柳井町（現在の柳井市）に引き揚げた。1947年（昭和22）に米川村を訪ねた時、たまきが多忙を極めていたのを知り、既に内定していた山形県の青年学校の教師の職を辞退して、た

まきを支えることを決めた。翌年には米川村出身の画家沼倉正見と結婚した[11]。

沼倉たまきは二度目の選挙でも議席を守り、町村合併後も落選することなく、18年間連続で議席を保持した。宮城県初の女性の町村議会議員12人の中では、在任期間は最長である。

沼倉たまきの議員歴は次の通りである[12]。所属議会の村町名が異なるのは町村合併による。いずれの議会でも唯一の女性議員であった。

米川村議会議員［写真３］
（1947年４月30日～1956年９月29日）
日高村議会議員
（1956年９月30日～1957年４月30日）
東和町議会議員
（1957年５月１日～1965年５月14日）

写真３　米川村議会議員時代
出典：『登米郡米川村誌』

占領下にあった1950年（昭和25）６月には、彼女が戦前に夫や息子と暮らした朝鮮半島で戦争が勃発、同年８月には警察予備隊令が公布された。1951年（昭和26）１月に日教組は「教え子を戦場に送るな」運動を進めることを決めた。再軍備が進むなかで、女性の一票に期待した沼倉たまきは、米川新聞５号（1951.2.25）に「政治と女性」の題で一文を掲載している。

「女性の政治的関心を阻むものは、何といっても家族制度の制約である。政治問題となると、主人が代表し家族は全部之に従うと云う様なことが、今日も尚社会的又は道徳的な制約として存在し、此の惰性的な拘束力は相当に強い。特に田舎に於いて女性が進歩的な行動に出ると「女のくせに」と非難される。従って近隣から喜ばれないような積極的行動に出ることを差控え、外部的なことは一切口に出さないようになる……政治は個人を単位とすべく、家族が単位でない事を自覚し、拘束する悪習を勇敢に打破し、主体的な態度をもって臨まなければならない」と、女性の覚醒を促した。

沼倉たまきは女性の進歩的な行動を非難する「惰性的な拘束力」から、女性たちが抜け出すことを期待した。それゆえ1952年（昭和27）に静岡県でおきた「村八分事件」を、米川新聞58号（1952.9.1）で取りあげている。「今年の初め静岡県で行われた補欠選挙で村のボス達の違反を検事局に知らせた高等学校の女生徒一家が「村八分」という封建的なリンチをうけたという事件。独立後、第一回の総選挙が公明選挙を口にしながら反動的な方向にたどりがちな現実に負けないで、一人一人が強い気持ちになって、日本に正しい前進をさせる意気込みを持とう」と説く。現職の議員である沼倉たまきにとって、「村八分事件」は、女子高校生の正義が古い権力によって、潰された衝撃的な事件であった。その憤りが平常よりも強い文体になっている。

米川新聞には事実誤認の部分があるので「村八分事件」について概略を記す。この事件は、1952年（昭和27）静岡県富士郡上野村に住む県立富士宮高校二年生であった女子生徒が、選挙違反を告発したことで村八分にされた事件である。石川皐月は同年五月の参議院補欠選挙で組織的な替え玉投票がおこなわれたことを、朝日新聞社静岡支局に実名で告発した。関係者は警察に出頭を命じられ、その直後から村では、彼女と家族に対して挨拶をしない、田植えの手伝いをしない、奨学金を停止させようとする等の「村八分」が行われた。しかし、問題が全国的に知られるようになると支援の声が高まり、翌年に映画化され、村の中に戦後も残る封建性を問い直す契機となった[13]。

1965年（昭和40）に68歳になった沼倉たまきは議員生活を退き、この年に米川新聞は終刊になった。1966年（昭和41）12月にカトリックの

写真４　1980年代　米川の自宅庭にて

洗礼を受けた（洗礼名モニカ）。1981年（昭和56）５月には米川聖マリア保育園で「環先生米寿を祝う集い」が米川新聞を共に発行した仲間や教え子ら120人が参加して盛大に行われた。

1984年（昭和59）に勲六等宝冠章を受章した。東和広報（1984年８月１日）は受章の理由について、沼倉たまきが戦前戦後を通じて35年間にわたり教職につき地域の教育に貢献し、18年間議員として地方自治の発展に尽くし、さらに米川新聞を500号まで発行したことを挙げている。

晩年は得意な水彩画で庭の花を描いて楽しむ等、悠々自適の生活を過ごした［**写真４**］。

1985年（昭和60）に、子どもの無いたまきは、沼倉正見・満帆夫妻と養子縁組をした。1990年（平成２）５月11日、米川の自宅において94歳で死去した。[14]

沼倉たまきの18年間の議員生活の中で11年間は、及川哲夫が米川村村長、日高村村長、東和町町長であり、村政や町政の場で共に活動した。及川哲夫は弔辞で、彼女の議員時代に言及して「町村合併の諸問題、役場の位置の決定と生産森林組合結成、更に錦織小中学校及び嵯峨小学校に屋体建設の件、米谷定時制高校の組織替県立移管等々の山積している問題について議員として格別のご協力を戴いた事を憶い起こすのであります」「教育の問題、及び当時から話題の社会福祉に先鞭をつけられ一般質問及意見の開陳が多かった事を憶い起こすのであります」[15] と沼倉たまきを偲んでいる。

２．米川新聞の変遷

⑴　米川村文化協会の設立

沼倉たまきが米川に戻ったのは1945年（昭和20）12月である。その時から、1951年（昭和26）１月に米川新聞が創刊されるまでの５年間は戦後復興の時代であり、民主化を求める変革の時代であった。この時代の影響は米川村にも、沼倉たまき自身にも及ぶことになった。米川村民の有志、特に教員たちの民主化への反応は早く、彼らは1946年（昭和21）春に「会員相互の文化水準を高めることを目的に」、米川村文化協会を設立した。同協会の会長は及川哲夫である。

米川村文化協会の会誌は創刊号（**資料２**）と第２号（**資料３**）が確認できる。会誌の編集は及川哲夫他２名、印刷は沼倉たまき他１人の合計５人が担当した。

米川村文化協会が発足した当時の「昭和二十一年の新緑の頃は食糧危機の最中であり、戦後の思想動揺期にも当って居たので、世情はやかましく、さまざまの浮説も行われて「文化」などといふ、ふんわりしたものは、其の風潮にそぐわない様にも見えた」[16] と記されている。しかし、1946年（昭和21）春に発足した当初は30人程の会員が、同年末には80人に増えている。

米川村文化協会は1946年（昭和21）９月21日に季刊誌「山」の創刊号を発行した。ガリ版刷りで24頁の冊子には論説や文芸作品が掲載され、表紙画は沼倉正見が担当した。

1946年（昭和21）12月30日発行の第２号には、会員たちが描く村の未来像である「十年後の米川村文化構想図」（**資料４**）が掲載されている。「構想図」の「教養ある生活」の項目にある「信仰の生活」の語句は、米川村の宗教的な特殊性による。

「構想図」は２枚ある。１枚目は（**資料４**）で、２枚目は１枚目の構想図を地図化したものである。「米川駅」の東西には「至津谷」と「至米谷浅水」と書かれた線路が伸び、線路には煙を吐きながら走る小さな列車が描かれている。

資料２　米川村文化協会会誌『山』創刊号（1946年９月21日）

資料３　米川村文化協会会誌『山』第２号（1946年12月30日）

駅舎の近くには中学校、病院、公民館があり、二股川には「ネコハシ」「サベバシ」が架橋され、公衆電話の設置場所まで地図に記されている。

また、第２号によると、文化協会は次の４部門から構成されていた。

- 精神文化部（会誌の発行、新刊図書の購入等）副部長は沼倉たまき
- 体育部（テニスコート開設、村内野球試合開催等）
- 芸能文化部（沼倉氏個展後援、レコードコンサート開催、復員者慰安会）部長は画家の沼倉正見[17]
- 生活科学部（山菜野草の研究、生活改善の討議）

米川村文化協会の会員たちは将来のビジョンを示すだけではなく、現実的な活動を開始し成果を上げている。その一つが「文協文庫」の設立で、42人から募った寄付金1,180円の中から、書籍150冊を購入して、将来的には村立図書館への拡充を会員たちは期待した。

戦前、沼倉たまきは父親の介護のために一時帰郷をした数年を除くと20数年間、米川村を不在にしていた。しかし、戦後、沼倉たまきは米川新聞を創刊するまでの５年間、米川小中学校の教師として、米川村文化協会の主要メンバーとして、婦人会の会長として、村議会議員として八面六臂の活動を展開し、地域リーダーとしての信用を得て、満を持しての新聞発行であったと推測される。

⑵　米川新聞の創刊

米川新聞の編集責任者は沼倉たまきであるが、その取材活動や編集作業を支えたのは「同人」といわれる人々である。「同人」の一人は最初の編集会議の様子を次のように伝えている。「たまき先生を中心にして、米川新聞の発行について同人と話し合ったのは、敗戦の動揺から落ち着きつつあった昭和二十五年の十二月でありました。先生のお考えに賛同して集まった同人の職業年齢は多種多様でした。小中学校の教員、郵便局員、東北電力会社社員、団体職員そして農業人あり、商業人ありで、年齢も下

十年後の米川村文化構想図

教養ある生活＝ 豊かな楽しい生活 ＝合理化された生活

生活の民主化
科学心の啓培
信仰の生活
公衆道徳の昂揚

⇩ 教育　⇩ 厚生

生活の電化
生活の機械化
生活の協同化
生活の科学化

⇩ 産業　⇩ 交通

（教育）
- 国民学校
- 初級中学校
- 公会堂
- 公民館
- 図書館
- 寺院
- 教会

（厚生）
- 託児所
- 共同炊事場
- 共同風呂、理髪場
- 村立病院
- 村立保険組合事務所
- 常設館
- 警防団本部
- 警防団詰所
- ガソリンポンプ
- サイレン
- 公衆電話（村内20か所）

（農業会関係）
- 農業会事務所
- 共同作業場
- 農機具修理工場
- 共同採種園
- 果樹園
- 共同育苗場
- 藁煙草収納所
- 家畜診療院
- 種馬種牛所
- ホームスパン工場

（森林組合関係）
- 森林組合事務所
- 製材工場
- 林業苗圃
- 木工場
- 炭団工場
- 下駄サンダル工場

（耕地関係）
- 上沢ダム建設
- 開田
- 開田地帯二毛作
- 耕地区割整理

（交通）
- 鉄道（米谷浅水―津谷―三陸鉄道と連絡）
- 駅（米川駅）
- バス道路開通
- 村営循環バス
- 村道、トラック道路開通
- 猫ノ沢架橋他

資料４　「十年後の米川村文化構想図」

出典：米川村文化協会会誌『山』第２号（1946年12月30日）から作成。

宮城風土記

189

隠れキリシタンの巻

(8)

手作り新聞で啓もう

一神のお見守りを受け、心身が乱れません。残り少ない人生ですが、この手手キリッと締まった日々を――東和町米川字町の日々を、敬けんなクリスチャン、沼倉たまきさんぐらが目をとじます。

手には、ガリ版刷り、タブロイド判の「米川新聞」のとじ込み。戦後の二十六年、気鋭の青年男女たちと創刊、十五年間五百号を発行した貴重な記録である。その啓もう的論調は、敗戦の動揺にあえぐ村人の心を支え、草創期の米川教会を励まし、「キリシタンの里」の黄金時代のいしずえとなった。

沼倉さんは旧米川村猿利原の生まれ。小学校長を務めた祖父の薫陶を受け、仙台の女子師範学校で学び、母校の小学校の教壇に立った。ほどなく、朝鮮総督府勤務の兄を頼って渡航、ソウルの日本人小学校で、終戦までの約二十年間を過ごし、二年十二月帰郷、やがて、発足早々の中学校で教べんをとった。

当時、村人は敗戦の虚脱感のただ中にあった。「戦災にあったわけでもないのに、と術がゆい思いがしましてね」。何事にも「黙っていられない」タチ子一を自負する沼倉さんは、集会所で、町角で説いて回った。

「これからの日本は私たちの手で築き上げていくのです。たくましく生きようではないですか」。真摯（しんし）な説得は青年や婦人の共感を呼び、担ぎ出されて村議選に当選した。婦人は参政権を認められた直後、二十四年のことだ。以来、「紅一点」として五期連続当選、村政刷新に活躍する。

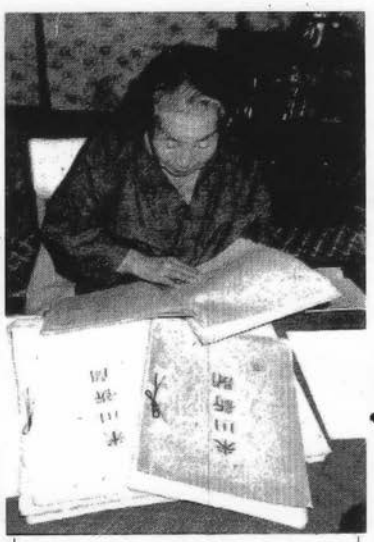
「米川新聞」の創刊は二十六年一月である。「村には広報紙がなかった。もっとみんなに村政に関心を持ってもらおう、と思いましてね。二十、四十代の主婦を中心に約二十人の手助けで、十日ごとに月二回のペースで三百五十部ずつ発行した。手書きのガリバン刷り、タブロイド判のたった二ページだが、当時としては画期的。一面は政治、社説、ド段には「天声人語」にあたる「炎の笑」。裏面には家庭、文芸のほか囲碁も設けるなど新なところして進歩的な考え方を紙面にぶつけて活躍していたところ、小林育方司教さんと知り合い、キリスト教布教の応援の旗振り役を展開する。

「当時は速記筆記者ではなかったが、司教の話をうかがえば人々の視野が広がり、刺激にもなると思いましたから」。ちょうど「隠れキリシタンの里」として注目され出した直後だけに、集団洗礼や教会の設立、小林司教の活躍ぶりを克明に紹介。その後も、島村泰三神父（四代司祭）のエッセーシリーズや、村賀ステファノ神父（五代司祭）の「青い目で見た米川」シリーズなども折にふれて掲載、四十年の五百号で幕を閉じるまで一貫して教会の心強い応援部隊となった。

百号ごとにとじられた黄色に変色した紙面のあちこちから、当時の沼倉さんたちの熱い思い、息吹が伝わってくる。例えば三十四年十一月十一日号。一面に母親と女教師のつどい、町民運動会の反省など。裏面に農協だよりや「小林司教が贈る心の花束」。三十五年六月十一日号では、安保改定問題をめぐって、座談会の模様が裏面一面の特集号――。

沼倉さんの議員生活とともに歩んだ新聞の灯は消えた。が、人々に多くの遺産を残した。ある女性信者はこう話す。「列教の地と聞かれても、列教の深い意味が分からない人たちも多かった。新聞は大いなる参考書でした。もし新聞がなかったら、あれだけの熱気が生み出されたかどうか……」

沼倉さんが洗礼を受けたのは、新聞の灯が消える直前のことだ。「村宣神父の人柄にほれ込んで気持ちが傾いたのね。残り少ない人生を神にお頼りしていきたかった」。今は、教会の女性信者の世話を受けながら、書道に励んだり、ピンポンを楽しむなど悠々自適の生活を送る一方、敬けんなクリスチャンとして人々の尊敬を一身に集めている。かくしゃくとした気品あふれる姿から、年輪の重みが立ち上ってくるようだ。



「殉教の地」での布教を支えた「米川新聞」を懐かしそうに読む沼倉さん
＝登米郡東和町米川の自宅で

資料５　「米川新聞を読む沼倉たまき」

『朝日新聞』宮城版（1984年12月16日）

㊟　文中の１段目と３段目にタブロイド判とあるが、Ｂ４版が正しい。

は十代後半から、上は五十代後半までの幅のある構成で、同志の数は男女十七名におよんでいました」「（たまき先生は）地域の人々に正しいニュース、明るいニュースを知らせるとともに地域の発展向上について、地域の人々と一緒に考え語り合う新聞をつくろうとみんなに切々と話された」「メンバーは先生のお考え情熱にすっかり意気投合」して、「新聞づくりに関する具体的な話し合いが真夜中まで続いた」

新聞は有料で月３回（旬刊）発行して、その配達と集金は小学生と中学生の希望者に頼むことにした。配達や集金を担当した「小さな同人」への報酬は不明である。しかし、米川新聞には米川新聞協会が慰安旅行の名前で松島や気仙沼に日帰りでバス旅行をした記事があるので、このような形で「報酬」が与えられたと推測される。

編集と印刷の作業は夜７時から米川中学校の職員室を借りることを決めた。同校の校長及川哲夫の理解と協力があった。

「みんなで地域のニュースや自分で書いた原稿を持ち寄り、ガリ版の上の原紙に原稿を鉄筆で書き謄写版で一枚一枚印刷し、発行部数の四五〇枚が刷り上がった時は、うれしさのあまり全員で万才したものでした」[18] と記している。米川新聞の挿絵は沼倉正見が担当した。

創刊号の「発刊の辞」によると、新聞発行の目的は「村内に起こる種々の事件、村政の動き、各団体の動き、産業経済の問題、教育、文芸、スポーツ等、我々の最も身近な所に起こる問題をとらえて之を報道し、名士先輩諸議の貴い意見や諸者の方々のご批判或いは投書も掲載して、村から暗い影をなくし住みよい村の建設の為」とある。

米川新聞は1965年（昭和40）に終刊となり、その20年後の1984年（昭和59）に朝日新聞の取材をうけた沼倉たまきは、米川新聞の編集には「三十代、四十代の主婦を中心に約二十人の手助け」[19] があったと話している（**資料５**）。

昭和30年（1955）に宮城県町村議会議長会は座談会「村の政治をよくするために婦人議員はかく考える」を開催した。そのなかで、沼倉たまきは米川新聞を創刊した理由について「婦人の方にぜひ政治を知っていただきたい。自分たちが選出した議員がどういう発言をし、どういうことを考えておるか、女の方々に知っていただきたいと思って始めたのです」[20] と発言している。また、前述の新聞の取材では「もっとみんなに村政に関心を持ってもらおう、と思いましてね」「税金がどのように使われているか、議会報告に力を入れました」[21] と語っている。

米川新聞の紙面の主な構成は、一面右上は政治や経済に関する記事、一面左上は社説に相当する文章、一面下段は朝日新聞の「天声人語」にあたる「桑の実」の定位置であった。二面には「農事放談」「農事メモ」の農業関連情報、家庭欄の「家事メモ」、文芸欄には短歌や詩が掲載された。読者投稿欄「波紋」には、対立する双方の意見が必ず掲載され、ときには米川新聞への苦言や提案が載ることもある。投稿欄が公平で公明な内容になるように努力する編集者の姿勢が感じられる。「ほそみち」は身のまわりの出来事に、時にはユーモアを、時には風刺を交えたエッセイである。村内の小中学校、公民館、婦人会、教会等に広報紙が無かった時代には、各々の行事予定や人事異動が掲載されることもあった。小学生向けの景品付きクイズもある。出生欄、死亡欄、会葬御礼、火事見舞御礼、町内商店の広告など、家族で読める多彩な内容が盛り込まれている。

購読料は1953年（昭和28）１月から月額15円に変更になったことは確認できるが[22]、それ以外の時期の購読料は確認できない。

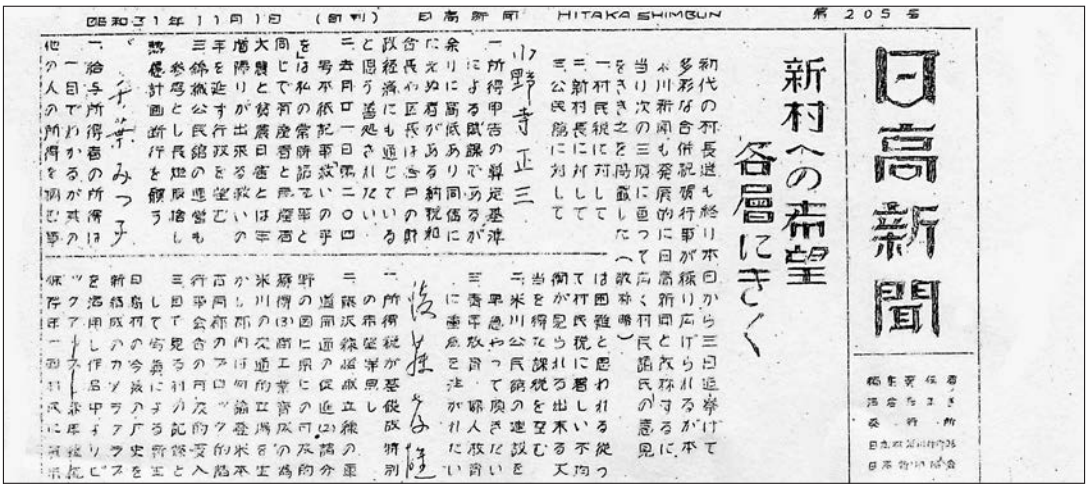
⑶　新聞の名称と編集責任者の変遷

米川新聞は1951年（昭和26）１月15日に創刊され、1965年（昭和40）に500号をもって終刊した。終刊号は残存していないため終刊の月日は不明である。しかし、米川新聞は月３回発行されているので、終刊まで順調に発行されていたならば、終刊日は1965年（昭和40）２月21日と推定される。

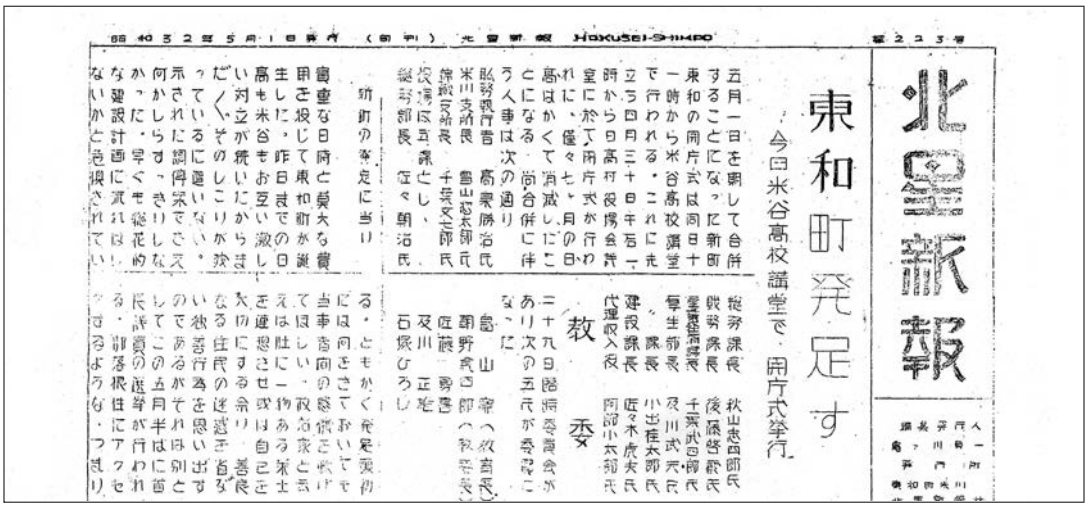
500号すべてが米川新聞と一般に言われ、本稿でも特に断りがない限り米川新聞と表記す

米川新聞
YONEKAWA SHINBUN
第1号
昭和26年1月15日（旬刊）
新校舎の行方？
―行き悩む学校敷地問題―
発刊の辞

資料６－１　『米川新聞』創刊号（1951年１月15日）


日高新聞
HITAKA SHIMBUN
第205号
昭和31年11月1日（創刊）
新村への希望
各層にきく

資料６－２　『日高新聞』205号（1956年11月１日）


北星新報
HOKUSEI-SHIMPO
第223号
昭和40年5月1日（旬刊）
東和町発足す
今日米谷高校講堂で開庁式挙行
教委

資料６－３　『北星新報』223号（1957年５月１日）

る。**表１**の如く名称の変遷はあるが、通し番号になっている（**資料６**）。

新聞名の改称は町村合併による。前述の通り、1956年（昭和31）に米川村と錦織村が合併して日高村になった。さらに翌年には日高村と米谷町が合併して東和町になった。この時、東和新聞ではなく北星新報と改称した。しかし、256号（1958.4.1）に「東和町全体の読者と共にをモットーに名前を変えつつ取材を進め全力を捧げて参りました」「このたび色々な事情から米川新聞として発展的な改名をいたしました」とある。「発展的な改名」とあるが、初心に戻り米川地区に密着した新聞を目指し、元の名前に戻したのであろう。

発行所の名称は米川新聞協会と米川新聞社の両方の表示があるが、住所は沼倉たまきの自宅住所である。編集責任者が亀掛川貢一に代わった後も、発行所の住所は変わっていない。

⑷　米川新聞に対する評価

創刊から１年を迎えた米川新聞34号（1952.1.1）は、創刊当時は農閑期新聞と危ぶまれ、農協機関紙と誤認される等の曲折があったと書いている。

100号（1953.11.11）の寄稿文「本紙百号に寄せて」は「自由な報知機関として民主的であり……我地方人の知る権利を満足させている」と評価した。200号（1956.9.11）には及川哲夫が「過去六ヶ年に亘りその時々の村民として知り度い事を、よく報道してくれた……一時的ではあったが、一部にその編集振りに対する批評等もあった様であるが、此の種の事業は誰がやっても観点の相違がある以上止むを得ないものと思う……今度の米川新聞にはどんな事が載っているか、あの問題をどう取扱っているか、と各人各様の角度から期待をかけて読まれる迄に築き上げたその努力に対して、敬意を表するものである」と好意的な一文を寄せている。

創刊から10年を迎えた319号（1960.1.15）には米川新聞編集者が、合併によって行政面積が広域化して町政が一般町民から遠くなり、米川新聞が低調になってきた、との自戒の言葉を記している。

401号（1962.5.21）は「本紙四〇〇号刊行によせて」の見出しで読者の意見を載せている。「徒に編集者のイデオロギーや一方的な主観を盛ることなく、あくまで公正と中立を基として偏らないよう」「取材編集に新鮮味をもられては」の苦言がある。編集責任者が代わってから「モグラのたわごと」の欄が新しく設けられ、編集責任者が自説を展開するようになった。「将来は東和町全域に普及する旬刊紙に育成するよう」との励ましの意見もある。

しかし、米川新聞の抱える課題とは別に、県外に出て働く人々にとって米川新聞は、故郷の様子を知らせてくれる貴重な情報源であり、望郷の思いを満たしてくれる新聞であった。故郷を離れた人々から「米川新聞の地方発送をお願いします」（358号、1961.2.21）と投稿が届い

表１　新聞の名称・発行期間・編集責任者

新聞名	発行期間（号）	編集責任者
米川新聞	1951. 1.15（ 1）～1956.10.21（204）	沼倉たまき
日高新聞	1956.11. 1（205）～1957. 4.21（222）	205～221号　沼倉たまき 222号　亀掛川貢一
北星新報	1957. 5. 1（223）～1958. 3.21（255）	亀掛川貢一
米川新聞	1958. 4. 1（256）～1965.□.□（500）	256～406号　亀掛川貢一 407号　不明 408～488号　米川新聞社 489～500号　不明

ている。

⑸　新聞の残存状況

表２　新聞の発行号数と未確認号数

新　聞　名	発行した号数	未確認の号数
米川新聞（1～204号）	204	5[23]
日高新聞	18	2[24]
北星新報	33	0
米川新聞（256~500号）	245	37[25]
	500	44

新聞のなかには、号が未記載のもの、号が重複しているものがあるが、日付から号が明らかに推定できるものは未確認号数に含まれていない。表２の通り、500号のうち確認できたものは456号分（2018年９月現在）で、500号の8.8％に相当する44号分が未確認である。

３．米川新聞のキリスト教布教の役割

戦後、米川村がいわゆる「隠れキリシタンの里」として注目されるようになった契機のひとつは、米川村綱木沢にある「三経塚」の由来が明らかになったことである。1952年（昭和27）にキリシタンに関わる古文書が米川村で発見された[26]。そのなかの「三経塚の由来之事」から享保年間に信者120人が処刑され、40人程ずつが３か所にお経と共に埋められたことが明らかになった[27]。

現在では否定されているが、1951年（昭和26）３月には、米川村西上沢で「天齢延寿巷主」の碑が発見され、当時はこの碑が後藤寿庵の墓であるとみなされた[28]。1952年（昭和27）に改めて後藤寿庵の墓碑が米川村狼河原地区に建てられ、除幕式にはカトリックの司教、宮城県教育長等が参列して挙行されたことが、米川新聞60号（1952. 9. 21）に掲載されている。

1954年（昭和29）３月にカトリック仙台教区長に就任した小林有方司教（教区長退任後、米川カトリック教会の八代主任司祭に就任）は、郷土史家の只野淳氏に「宮城県北に米川という不思議な村があります。三百五十年前の殉教者の子孫が住む村落です」[29]と誘われ、1954年（昭和29）７月に初めて米川村を訪れた。同年秋には「米川カトリック研究会」が発足した。翌年の1955年（昭和30）７月10日に米川村で175人が受洗する「集団受洗」がおこなわれた。「男が67人、女108人で、女性が全体の61.7％、小学生や中学生を中心とした20歳未満の男女が全体の84.6％を占めていた」[30]

小・中学生の受洗者が多い理由の１つは、米川小・中学校の理解と協力があった。子どもたちがカトリックの教理を勉強するために、善き牧者修道女会の２人のシスターが、週に１回仙台から米川村に通ってきた。その時は放課後の小学校の教室が使われた。また、集団洗礼式の時には教会がまだ建てられていなかったので、中学校の広い講堂が式場になった[31]。

集団洗礼式の様子は、『アサヒグラフ』（1955年７月27日号）で「バテレン村に主は来ませり――宮城県登米郡米川村――」のタイトルで大々的に報道された。その後も受洗者数は増えて、同年12月17日に59人受洗、12月24日に77人が受洗した[32]。

伊藤幹治氏は全国のカトリック信者数が戦時中の1940年と戦後の1950年を比較すると２倍近くに増加している理由を「カトリック側が伝道方針を転換して、戦災にあわなかった農山村の集団伝道に勢力を集中したことによるところが大きい」ことを指摘し、1949年に京都府何鹿郡佐賀村で集団洗礼があったことを紹介している[33]。

米川カトリック教会は創立25周年を記念して「思い出を語る夕べ」というテーマで座談会をおこなった。座談会には沼倉たまきも参加していた。司会者から、「（米川新聞は）間接の布教をしてくれた」と米川カトリック教会の主任司祭が評価している、と発言があった[34]。

「間接の布教」の評価について、米川新聞に掲載されているキリスト教関連記事を検討すると、記事の内容から３つの時期に分けることができる。キリスト教関連記事が掲載されている号数と、主要な記事はその見出しを抄録する。

1．キリシタン関係の資料や遺跡が発見されて後藤寿庵への関心が高まった時期（1951年～53年、掲載号数は13）

［掲載号］

- 8号（1951.3.25）「カトリック聖人後藤寿庵の墓発見さる」
- 75号（1953.2.21）「郷土史　三経塚由来の事」
- 他の掲載号
  （20号、22号、33号、34号、51号、53号、55号、59号、60号、61号、76号）

2．小林有方司教が米川村を訪問後、カトリック伝道活動が活発になった時期（1954年～59年、掲載号数は34）

［掲載号］

- 124号（1954.7.11）「カトリック東北管区司教小林氏、尊敬と愛情をもって来村と語る」
- 137号（1954.11.21）「聖書研究会」
- 143号（1955.1.24）「新春座談会　若い世代に聴く」
- 159号（1955.7.11）「全国的にも異例の式　集団洗礼」
- 181号（1956.3.1）「米川聖マリア保育園　4月から開園」[35]
- 208号（1956.12.1）「小林司教欧米視察帰朝報告大講演会」[36]
- 241号（1957.11.1）「カナダ・レミュ大司教の贈物　米川聖堂落成」
- 285号（1959.2.1）「つどいロザリオ会の巻」[37]
- 301号（1959.7.10）「集団洗礼4周年」
- 313号（1959.11.11）「小林司教の講話案内　毎木曜日7時から」
- 他の掲載号
  （134号、138号、169号、183号、189号、193号、209号、218号、222号、225号、234号、240号、255号、256号、257号、260号、278号、284号、286号、287号、289号、290号、291号、331号）

3．米川カトリック教会神父の随筆が掲載された時期（1960年～63年、掲載号数は24）

［掲載号］

- 347号（1960.11.1）「浅沼事件について　平田浩神父」[38]
- 351号（1960.12.11）「女性の力　島村泰三神父」[39]
- 432号（1963.4.1）「青い眼で見た米川村首ステファノ神父」[40]
- 他の掲載号
  （352号、354～363号、365号、367号、371号、379号、386号、392号、403号、423号、425号、429号）

1960年（昭和35）から教会行事を知らせる記事が無くなるのは、同年から教会報「じゅあん」が発行されたからである。

同じ号に複数のカトリック関連記事が掲載されている場合も若干あるが、煩雑さを避けるために号数で数えると71ある。米川新聞の確認されている号数456の15.6％に相当する。米川新聞に教会建設に関わること、教会付属の保育園の開園、司祭の異動、教会の行事等の記事を掲載することが、布教活動の一端を担っていることは確かである。その意味では、米川新聞は「間接的布教」「教会の心強い応援部隊」[41]の役割を果たしている。

記事の内容を吟味すると、地域情報の一つに教会関連情報があった。たとえば郷土史の見出しでカトリック遺跡を紹介し、住民の関心が高く身近な情報である保育園の開設や教会の建設等を知らせている。地域の知識人の代表として神父が、教義ではなく身辺雑記や時事問題に関する随筆を寄稿している。

注目すべき点は、米川新聞がカトリックの布教活動や地域住民のキリスト教の受容について率直な意見を掲載していることである。

134号（1954.10.21）の、「桑の実」に米川新聞の編集者が「（カトリックの殉教者多数を出した）米川村をキリスト教の聖地として、精神運動の基地にしたいという夢をもつカトリックの神父さんもある。現代の私達には、直接目

に見えないものへの理解とか関心を持つことが極めて困難になっている事は事実であって、之を宗教家は失われた人間として眺めているようであるが……形に現れたものを通して精神の世界に高めて行ける道筋を通らないと、宗教家の夢のままで終ってしまうのではなかろうか。民衆は有難いお説教だけではついて行けないし又起き上りもしないのではなかろうか」と記している。米川村にはカトリック信者でない村民も、また無神論者もいる。米川新聞はそのような少数者の声を代弁し、新聞人として宗教的な中立を示したのかもしれない。

また、143号（1955.1.24）「新春座談会　若い世代に聴く」のなかで、米川新聞の記者が宗教と経済をテーマに青年たちに質問すると、ある青年が「自分だけが幸福になるなら宗教によって出来ようが、家族を幸福にするには、それに経済がともなわないことには」「信仰だけで経済が楽になるとは思われない」と応え、若者の率直な意見を掲載している。

米川新聞には「ほそみち」というタイトルで、辛口で世相をとらえるコラムがある。359号（1961.3.11）に、「すがすがしく迎えた旧正月元旦、口をすすぎ身を清めたお父さん、うやうやしく神ダナの前に進んで「五穀ホージョー、国家安全」[42]と、かしわ手うてば、今年七つのＡ子ちゃんと五つのＳ坊保育園のおしこみよろしく「チチトコトセイレイノミナニヨリテアーメン」▼これに続いたのは三才になったＴ坊や「ナンミョーホレンゲッチョ、ナンミョーホレンゲッチョ」▼ところが昨夜来の年越パーテーで大分夜更しをし遂に今朝に及んでやっと床にもぐり込んだハイテーンのＫ君の床の中から「アアアリガタヤアリガタヤー」[43]」とある。

米川地区では伊藤幹治氏が指摘する「家督相続者非受洗の法則」がみられ、集団洗礼の受洗者の多くが女性と子どもたちであった。それゆえ「ほそみち」のような家族が米川地区には少なからずあり、「ほそみち」の内容は読者の共感と苦笑を誘ったことであろう。米川新聞は住民のありのままの姿を拾い上げ伝えている新聞である。米川新聞が教会の広報紙の役割を最優先する新聞であるならば、前記の134号、143号、359号にあるような文章は掲載されないであろう。

米川カトリック教会創立25周年記念誌である『身も魂も』には、前述の通り、米川新聞に掲載されたキリスト教関連記事が抜粋・抄録されている。米川新聞からキリスト教関連記事を抜き出す作業をしたのは沼倉たまきである。沼倉たまきは1966年（昭和41）に受洗し、1980（昭和55）年に記念誌が発行された時には信者であった。134号、143号、359号の記事が記念誌に抄録されていることから、カトリック教会も沼倉たまきも、当時の住民のカトリック受容について、ありのままの姿を受けとめているといえる。

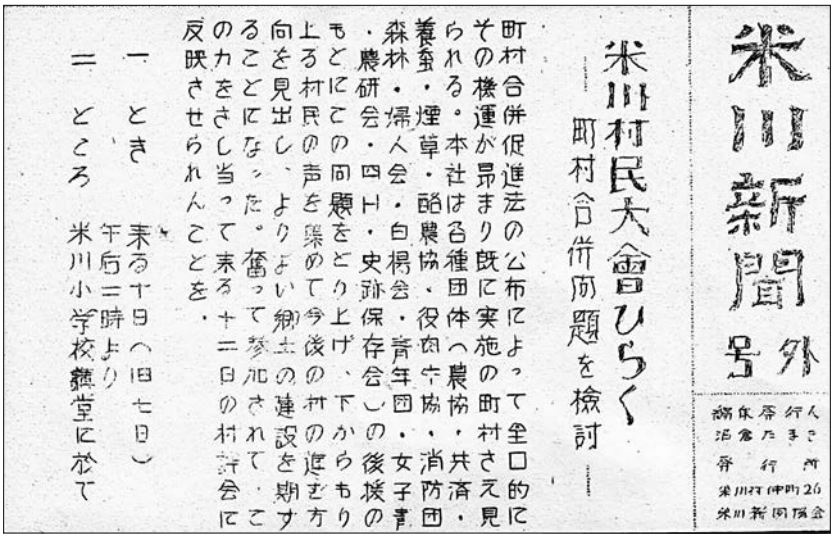
4．昭和30年代の町村合併と米川新聞

(1)　米川村民大会の開催

1953年（昭和28）９月１日、町村合併促進法が公布された。この法は有効期限を1956年（昭和31）９月末迄とする時限立法であった。人口８千人以下の町村が合併の対象になった。

宮城県は1953年（昭和28）末の５市182か町村を最終的には６市61か町村に合併しようとした。

宮城県は登米郡に対して米谷町、上沼村、浅水村、錦織村、米川村の１町４か村の合併を提案した。しかし、農業用水を中田沼に依存する上沼村・浅水村・石森町・宝江村は中田水系４か町村の合併を望んだ。その後、県は中田水系の４か町村と北上川の東部にある米谷町、米川村、錦織村の川東３か町村を合わせた７か町村合併の県案を提示した（**資料１**）。中田水系４か町村は県の案を受け入れず、1956年（昭和31）４月に中田町が発足した。残された川東３か町村は協議を重ねたが、米谷町とは役場の位置問題で折り合わず、結局、米川村と錦織村が合併して、1956年（昭和31）９月に日高村が誕生した。その結果、米谷町が取り残された形になり、県の強い勧奨が再度あり、1957年（昭和


米川新聞　号外

編集兼発行人　沼倉たまき
発行所　米川村伊所26　米川新聞協会

米川村民大会ひらく
町村合併問題を検討

町村合併促進法の公布によって全口的にその機運が昂まり既に実施の町村さえ見られる。本社は各種団体へ農協・共済・養蚕・煙草・酪農協・役場・消防団・森林・婦人会・白樹会・青年団・女子青・農研会・四H・史跡保存会の後援のもとにこの問題をとり上げ、下からもり上る村民の声を集めて今後の村の進む方向を見出し、よりよい郷土の建設を期することになった。奮って参加されてこの力をさし当って来る十二日の村計会に反映させられんことを。

一　とき　来る十日（旧七日）午后二時より
二　ところ　米川小学校講堂に於て

資料７　「村民大会を知らせる号外」（1954年２月□日）

32）５月に日高村と米谷町が合併して東和町になった。

以上が、旧米川村が辿った町村合併の概略である。合併の過程は、村民の村政への熱意が公権力によって徐々に押しつぶされてゆく過程でもあった。

米川新聞は町村合併時の議会の動向を詳細に伝えている。議会での発言を記録し、新聞に再現できたのは、沼倉たまきに速記の技術があったからである。

米川新聞協会が地域の情報を報道する役割を超え、自らが情報をつくり出す役割を担ったのが、1954年（昭和29）に村民大会の主催者になった時である。『東和町史』の中で村民大会についての記述があるのは「米川村に於いては、昭和二十九年一月以降村議会あるいは村民大会（下線は筆者）等によって、岩手県大津保村の大篭および岩手県黄海村の中山を吸収し、錦織村と合併する方針を決定した」[44] の１か所である。

米川新聞107号（1954.1.21）の一面に「委ねられない町村合併――近く公聴会開催されん――」の見出しで、紙面には宮城県登米郡の米谷町と錦織村、岩手県大津保村大籠地区の土地利用別（田、畑、私有林、村有林、県有林、国有林）の面積を掲載している。村民が町村合併の候補として、この３つを考えていたことを推測できる。米川村と大籠地区は江戸時代のキリシタン殉教の地として共通点があった。

米川新聞協会は、何れの町村と合併するのが好ましいかは、村当局や審議会だけで決定すべきではなく、村民の意見を聞くべきであると考え、米川村民大会を主催することを決め、号外を出した（資料７）。

米川新聞109号（1954.2.11）一面は「世論の結集　初の町村合併促進村民大会」の見出しで、村民大会までの準備と大会当日の熱気を次のように知らせている。「町村合併促進村民大会は小春を思わせる二月十日定例を十分遅れ二時十分から本社沼倉代表の開会の辞に始められた。本社では号外によって大会の重要を強調、周知に盡し前夜は宣伝カーを繰出して村民によびかけ準備に万全を期した甲斐あって参会者三百五十名　会場にはスローガン[45] や新鋭のテープレコーダー等が備え付けられ大会気分の横溢する中に議長選出　Ｓ氏Ｇ氏就任　型通りの記録□名委員が選出され空前の村民大会の幕が切って落とされた」

この記事で興味深いのは、村会議員である沼倉たまきが、村民大会の主催者代表として開会の辞を述べていることである。この時点では、町村合併が政治的な混迷に陥る前であり、議員

の立場からも村民の意見を広く聴くことが重要であると判断したからであろう。

大会は次のように進められた。

1　経過報告：主催者側が大会に至るまでの経緯を述べ、村当局は村長と議長が欠席したので、議会代表のH氏が町村合併問題の経過を報告し、村議会が無為にしていたわけではないと弁明した。

2　意見発表：E氏が合併の時期を失って受身の立場に廻るべきではない、農地解放の恩恵に浴さない我々山村民の唯一の頼りである村有財産の適正なる処置を望むと熱弁をふるうと満場の拍手がわいた。G氏は川東三か町村よりも岩手県との直結を考えるべし、と訴えた。意見発表者のなかで唯一の女性Gさんは、当局へ正しい良識と判断で本大会の世論をとりあげ、最大多数の利益をはかるよう要望した。H氏は川東三か町村に賛成、錦織村との連携なれば米谷町恐るるに足らず、と述べた。C氏は世論を結集して、当局が之を統一して速やかに外部に働きかけるべきで、山は山同士が望ましいと述べ、事前に決められていた発表者が終わると、一般からの意見発表に移った。

3　一般意見発表：M氏が当局並びに議会に対して政治的貧困と責任を厳しく追及すると、大会に参加していた二人の議員が「憤然色を作して失言取消を要望」して、収拾困難かと思われたが、議長の適切な処理によって本筋に戻る、という緊張した一幕もあった。地方事務所のS次長から「いずれ促進協議会を作った上で研究検討を加え、新町村建設計画書に住民の利益を計る具体的な計画を盛っておくが良し」と助言があった。

4　決議文朗読：C氏から動議が出された。本大会決議文を作成し、当局・議会にこれを反映させたい旨を発言すると「異議なく動議成立。同氏朗々と読み上げ終ると万堂万雷の如き拍手を以てこたえ承認」とある。決議文のなかで、村民が村当局と村議会に要望したのは次の5点である。1合併促進協議会（仮称）の促進強化、2村民世論の尊重、3公共施設の拡充、4生計安定百年の大計、5共有財産の適正保全。

一方、村当局を代表して助役は「当局の腹案と決意の一端を披露しその動向を釈明、村民の協力を要望」した。米川新聞によると、村民大会は終始緊張した空気のなか、実に三時間二十分に及び、午後五時三十分に終った。

次号の米川新聞110号（1954.2.21）によると、大会2日後の2月12日に開催された村議会で、村長が村民大会に欠席した理由を問われると「村民大会開催の通知は受け取ったが役場に何等連絡がなかった」、つまり村長宛の通知はあったが役場宛の通知はなかった、と弁明した。村議会で町村合併問題を審議する時には、テープレコーダーが持ち込まれ、村民大会での村民の声を聞き協議が重ねられた。町村合併委員会の協力委員として、後に米川村村長になる及川哲夫等10人の名前が発表された。15日には町村合併委員会の最初の会議が開かれた。

米川新聞111号（1954.3.1）には「町村合併へ進出」の見出しで、隣村の大津保村大籠の小学校で町村合併懇談会が開かれ、米川村から村長、助役、議員5人と協力委員4人が参加した、とある。

米川新聞の投稿欄「波紋」は、当時の村長に対する賛否両論の評価を載せている。110号（1954.2.21）には「一主婦」の意見として「（村長・議長は）村民の皆さんが真剣になって集まっている時、何かの落成式に参加されたそうですが、そんな事は人を頼んでも済む事ではないでしょうか」と、村民大会を欠席した村長と議長を非難する一文が掲載された。他方、112号（1954.3.11）は「村長健在」の題で、大籠での町村合併懇談会で村長が「未だ嘗てない情熱を傾け、而も筋の通った演説をして聴衆を魅了した」と、村長支持者の投稿を掲載している。

⑵　日高村誕生の経過

米川新聞114号（1954.4.1）は、1954年（昭和29）年3月26日の米川村定例議会で米川村と錦織村との合併が決議された、と知らせてい

る。しかし、同号の「波紋」には米川村民の本音が語られている。「本村と錦織の両村の合併が決定され、本村としては新町村構成の第一歩を踏み出したのではあるが、第一の念願たる米川の主体確立には、今後の大籠部落の併合が是非共必要である」と述べ、そのためには大津保村の分村が前提であると自説を展開している。

岩手県東磐井郡大津保村は1889年（明治22）の町村制施行にともない大籠村・津谷川村・保呂羽村が合併した村である。米川村の隣村旧大籠村は、キリシタン殉教地であり、宗教的親和性のある旧大籠村との合併を米川村は望んだのであろう。しかし、米川新聞を見る限りでは、大籠地区との合併に宗教的な理由を挙げていることは一度もない。米川村民にとっては、説明不要の自明のことなのであろう。他県との合併は難しく、1954年（昭和29）に旧大籠村、旧保呂羽村、旧藤沢町、黄海村、八沢村が合併して新制の岩手県藤沢町になった[46]。

米川新聞116号（1954.4.21）は、米川村・錦織村の合併に対する県当局の次の3つの意見を載せている。1米川・錦織の2か村ではあまり行政費の節約にならない、2広域合併で役場の所在地が遠くなっても、出張所で大概の用は済む、3他県との合併に県は協力を惜しまないがむずかしく、知事としては県下の全町村を考えている故、好きな町村だけ合併して孤児的存在と成る町村を見放すわけにはゆかない、とある。

県の意向をうけて、米川村議会は米川村と錦織村の二村合併の見直しを迫られた。米川村会議員17人が2班に分かれ、合併を終えた岩手県北上市・花巻市、宮城県白石市を視察した（120号、1954.6.1）。6月8日には登米郡町村会事務所で町村合併における広域合併が議論された（121号、1954.6.11）。

合併問題が白熱する最中に、米川中学校建設資材をめぐる村長疑惑が明らかになった（117号、1954.5.1）。村民からは村長リコールの村民大会開催への動きが活発になり（1954.5.14発行の号外）、5月17日に村長は辞職に至った（119号、1954.5.21）。村長選挙が6月20日に行われ、米川村最後の村長に及川哲夫（元米川中学校校長、米川村教育委員）が当選した（121号、1954.6.21）。

1955年（昭和30）8月26日の村議会議員選挙は、町村合併を控えて村民の関心が高く、投票率は93.1％であった。沼倉たまきは137票を獲得し、定員22のなか6位で当選した。

前述の通り、県案の7か町村合併の中から、先に1町3か村が合併し中田町となった。その結果、必然的に米谷町・米川村・錦織村で一町の形をとることになった。しかし、三か町村の話し合いは進捗せず散会に終わる事もあった（191号、1956.6.11）。米谷町とは合併後の役場の設置場所で妥協点が見つからず、7月17日の緊急村議会で米川と錦織両村の合併が満場一致で決議された（195号、1956.7.21）。

1956年（昭和31）9月30日、米川村と錦織村が合併して日高村（人口9,425人、97.59平方キロ）[47]が誕生した。合併記念祝賀会では村長代理から、三か町村の合併が結局二か村となったが、時限法の期間中に実現をみたことは喜ばしい、との挨拶があった。日高村の村長選挙が10月27日におこなわれ、旧米川村の村長の及川哲夫が日高村初代村長になった。日高村の議会は旧米川村の20人、旧錦織村の15人の議員が、そのまま日高村の村会議員になった。

米川新聞は205号から日高新聞に改称された。日高新聞206号（1956.11.11）の社説は、「（合併後）村民の心配なのは何といっても税負担なのである。三ヶ年に亘る町村合併のために使用した経費は可なり莫大なもので、その大部分は視察費や酒ではないか」と合併で安堵する議員へ冗費の節約を求めている。

日高新聞212号（1957.1.11）によると、旧米川村と旧錦織村の2つの村の社会慣習の違いは成人式に影響を及ぼした。1957年（昭和32）の成人式は錦織地区のみでおこなわれた。それは「成人」を旧錦織村は満年齢、旧米川村は数え年で決めていたので、米川地区の該当者は錦織地区より1年早く成人式をすませていたからである。

⑶　東和町の誕生と北星新報

日高村が歩み出した矢先、1957年（昭和32）１月22日に臨時村議会がひらかれ、日高村と米谷町の合併について村長から「１月19日に日高村と米谷町に知事勧告が発せられた。勧告期間90日、その後に於いて庁舎位置と町名は知事の裁定があるかもしれない」（日高新聞214号、1957.2.1）という報告があった。

日高村が７か月の短命村として消えることになった背景には、町村合併促進法が３か年の時限立法であり、1956年（昭和31）９月末で失効することになっていたので、有効期限内に米川村と錦織村を合併し、人口八千人以上の村を創設するという成果を急いだことによる。

町村合併促進法に代わり新市町村建設促進法が1956年（昭和31）６月30日に公布施行された。当時、宮城県下の未合併町村は米谷町を含む18町村で、県の強力な勧奨があり、日高村と米谷町の合併が県主導で実施された[48]。

日高新聞222号（1957.4.21）は「五月一日から東和町として発足」の見出しで、次のように知らせている。

日高村と米谷町との合併について、県の調停案を無修正で呑むことに協議決定したことは、去る十七日発行の本紙号外で速報した。県調停案には、合体合併とする、役場の位置は合併後の裁定によって定める、財産処分については合併後において協議の上決定するとある。村長及川哲夫が村会の議決を得て、1957年（昭和32）４月17日付で「調停案受諾書」を宮城県知事大沼康宛に提出した。

同号の「波紋」には号外を読んだ村民が投稿し「庁舎位置、財産問題の二つを合併後にとあるが、このような合併を妨げてきた問題だからこそ、その納得いく解決があって、はじめて具体的な調停を成立させるのに、これを抜きにして「合併」のみを目的にした県のやり方に憤慨せざるを得ない」と県当局を痛烈に批判している。

かくて1957年（昭和32）５月１日に県の強い勧奨によって東和町（人口15,129人、面積140.75平方キロ）[49]が発足した。及川哲夫は米川村最後の村長、日高村唯一の村長、そして東和町初代町長に選出されて、東和町長を８期（1957年５月15日～1989年５月14日）務めた。

東和町が発足後、日高新聞は北星新報に改称された。北星新報は東和町の市井の人を紹介する「東和の人」という欄を新しく設け、東和町全体の新聞になるように紙面を工夫した。

1957年（昭和32）５月15日、東和町初の議会議員選挙は定員26、米川地区10人当選、米谷地区10人当選、錦織地区６人当選のなかで、沼倉たまきは25位で当選した。東和町議会で沼倉たまきは文教厚生常任委員をつとめた。

米谷町と揉めた役場の設置場所は、北星新報230号（1957.7.11）によると、東和町長宛に宮城県副知事西宮弘からの「役場の位置は三叉路付近に定めたい。ついては東和町当局の責任に於いて十分研究協議の上報告されたい」という通達で決定された。

町村合併時期における議員沼倉たまきの動静は新聞からほとんど伺うことは出来ない。しかし、町村合併の内容が一通の「勧告」や「通達」で決定される過程を、冷静な観察者となり、新聞を通じて住民に報告し続けた。

361号（1961.3.21）の紙面片隅に、沼倉たまきは「四年前、町議立候補の際、議会通信を公約いたし、本号の予算で議会通信を最後とし、そのお約束を果たし得てほっと致しました。永い間およみ下さいまして有難うございます。たまき」と書いている。361号で議会通信に一段落をつけた理由の一つは、新聞の編集責任者が222号（1957.4.21）から亀掛川貢一に代り、紙面構成が彼女の一存では、難しくなったことも一因と考えられる。

その後も沼倉たまきの議員生活は続き、1961年（昭和36）４月21日の東和町議会議員選挙では、定員26のなか、232票を獲得し21位で当選した。合併から４年が経過した選挙であるにもかかわらず、364号（1961.4.23）には「選挙戦を顧みて」のなかで「合併後における地区意識が未だに強く残っていることを幸いに、早くからデマを発し、或いはそれを利用しようとした向きも見逃しがたい……これに対し特筆

すべき傾向の一つに青年・婦人の真摯な動き（があった）」と記されている。沼倉たまきはこの選挙を最後に、任期を全うした1965年（昭和40）５月14日をもって議員生活を68歳で退いた。

５．米川中学校卒の就職者の動向――近江絹糸「人権争議」と「集団就職」――

⑴　昭和20年代後半の中卒就職者の職場環境

米川新聞42号（1952.３.21）によると、米川中学校を1952年（昭和27）３月に卒業した生徒146人のなかで、高校進学者は39人（26.7%）、全日制28人と定時制11人であった。

２年後の1954年（昭和29）３月の卒業生の進路を米川新聞113号（1954.３.21）からみると、卒業生110人（男61人、女49人）、高校進学者38人（34.5%）で進学率は上昇している。就職者は30人（27.3%）で、男子９人（男子卒業生の14.8%）、女子21人（女子卒業生の42.9%）で中卒女子のほぼ半数が就職している。村に残り農業等に従事する者は42人（38.2%）である。

1950年（昭和25）６月25日に朝鮮戦争が始まり、日本経済は金へん景気、糸へん景気で戦後不況を脱しつつあった。1951年（昭和26）10月25日の米川新聞28号には「女子工員緊急募集　愛知県蒲郡町　初給4,270円　希望者は役場へ」の募集広告が掲載されている。

1954年（昭和29年）３月卒の女子就職者の全員の勤務先が関東・東海地方の繊維関係の工場であった。同年４月、５月発行の米川新聞には、米川中学校教員の「工場訪問記」が掲載されている。

「工場訪問記」によると、新卒の就職者を上野駅まで引率した教員は、その後、関東・東海地方の11工場で働く卒業生90人に会っている。全員が健康で溌剌と働いていることを伝え、中卒就職者を「スレッカラシ」「可哀そう」と見るのは「とんでもない話」と否定する。「進学をあきらめ家庭生活を羨やむ気持ちは毛頭ない」「辛かろう、食いたかろう主義で文通される家庭は東北に多いと聞くが彼等からいわしめれば笑止であろう」と、都会で働く我が子を案じる親の気持ちを慮る内容になっている。

女工員になった卒業生は工場の規模に関係なく一日に二交代で「汗まみれ」になり働いていた。Ｄ紡織については「千数百名の陣容を整えての紡織事業は正に偉観である。事業施設は勿論、厚生教養施設は至れりつくせりで、特に医療施設はこれを見ただけで治ってしまいそう」（118号、1954.５.11）、Ｆ紡織については「日本屈指の大会社。高校卒業生も同じ機械で汗まみれ。米中卒は三名、今年又八名送り、新たな伝統を築こうと意気ごんでいる。洋和裁（縫）学（校）等実業学校に入学して働き乍ら学ぶ彼女等、誠に幸と申すべし」（同）と報告している。しかし、Ｎ織布は「織物と染色で全員三十名……家族的で策謀がないから危なげなく任せられる。願わくは賃金の奮発と教養施設の充実である」（116号、1954.４.21）、Ｋ織布は「戦後新興の大会社。テーブル掛の織物が主である……厚生・教養施設の充実に一段の努力をのぞむ」（同）。男子卒業生の職場であるＴ電機は「誕生尚浅く規模小なりと雖も、若い社長の下、ラジオ部品の製造に男子らしい仕事に熱中する彼等は真剣そのもの。教養面の施設の早急実現を望む」（118号、1954.５.11）と婉曲な表現ではあるが、不安要素も伝えている。

⑵　近江絹糸「人権争議」と米川中学校卒の就職者

紡績工場で働く卒業生の安否を気遣う事件が報道された。1954年（昭和29）６月２日に近江絹糸でいわゆる「人権争議」がおきた。

「人権争議」とは、1954年（昭和29）、滋賀県彦根市を創業地とする近江絹糸紡績株式会社で発生した労働争議である。1951年（昭和26）に女子寄宿生二十人余の犠牲者を出した映画会圧死事件があり、会社に対する非難が高まっていた。1954年（昭和29）６月２日の大阪本社における第二組合結成を機に各地の工場がストライキに突入。二十二の要求項目には、仏教の強制反対、親書開封反対、密告者報償制度廃止、結婚の自由などの要求があった[50]。

この「人権争議」がおきる３か月前に米川中学校を卒業した３人が近江絹糸に就職していた。同年７月１日の米川新聞123号の「桑の実」は「近江絹糸のストライキには、私達の村からも多数の子女を送っている以上決して無関心ではあり得ない▼近代のストの大部分が賃金値上の合法的な闘争であるときに、近江の場合ではそれ以前の人権闘争である事に異状な問題を含んでいる▼結婚の自由とか宗教の自由は民主日本の基本的な人権として尊重さるべき願いに対して、暴力団を雇って之を押さえようとした夏川某の如き経営者が許されている事は、日本の経済界にも政治界同様、最も封建的な前時代的なものが、根強く国民の生活を牛耳ろうとしている事を示す」と、この事件を論じている。

「人権争議」から10年後、米川中学校の職業指導主事は近江絹糸に就職している卒業生を訪ねて「朝は真白な富士が雄大に目の前に立ちはだかっています。黒に白い襟の制服もりりしく、急に大人になった様です。今年から定時制学級が出来、新しい教室がヅラリとならんで一□母校以上の施設です。従業員は約七○○名、木綿の糸の製品が主で新しい機械が導入された事が自慢、運動場も各種整っており、近代的に変わった様です」と、米川新聞469号（1964.4.1）に一文を寄せている。

⑶　米川中学校卒の就職者と「集団就職」

「米川中学校沿革史」によると、「昭和36年３月23日　就職生、集団就職（以後10年ほど続く）」[51] とある。しかし、米川中学校では「集団就職」の名前が一般化する前から、就職者の壮行会や就職地へ集団で出発することが行われていた。

北星新報255号（1958.3.21）によると、1958年（昭和33）３月17日に東和町主催の「町内中卒就職者壮行会」が米谷高校体育館で開かれ、町長・職安所長・町議会議長から激励の挨拶があり、記念品と茶菓が配られて懇談の後、教育委員長の万才三唱で閉会した。「一父親の談」として「就職に関する事務的な事は勿論、引率荷物輸送迄、関係の先生方に努力して頂き感謝の言葉もありません」とある。

同号は「本年の産業経済界、特に金属繊維関係は不況の為大企業の操短、中小企業の操業停止等のなか就職は困難を極めたが、当町では全員壮行会に出席し得た事は欣快である」と当時の社会状況を知らせている。

1957年（昭和32）前半まで神武景気と言われる程の好況が続いたが、同年後半から国際収支が悪化して、景気は急速に後退した。金融引き締め、株価暴落によって「なべ底不況」と呼ばれた不況になった。国内経済の変動が米川中学校卒業生の就職先にも直ぐに影響が及んだ。既に繊維産業に就職していた卒業生の中には、一時離職を余儀なくされ、肩身の狭い思いで帰郷した卒業生もいた。高度経済成長を支えた潜在能力の高い若年、特に中卒労働者を「金の卵」と表現される場合があるが、好況の時は「金の卵」と重宝されても、景気変動の影響を最初に受けるのも彼等であった。

米川新聞298号（1959.6.11）によると、1959年（昭和34）５月24日に東京の明治大学講堂に於いて「県外就職生集団補導会」が開催され、東和町から町長と米川中学校の就職担当教員が参加した。当日は約3,000人が集まり、会場では学校毎に一か所に纏まって、米川中学校卒業生は母校職員や在校生からの激励の手紙と町当局からのお土産を受取り、職場での悩みを語りあった。

東京で「県外就職生集団補導会」が開催された１か月程前の1959年（昭和34）４月10日に皇太子結婚パレードがおこなわれた。その実況放送をテレビで視聴するために、家庭にテレビが急速に普及したと言われている。しかし、米川新聞に地域の電気屋がテレビの広告をするのは２年後の1961年（昭和36）２月１日発行の356号が最初である。その時の電気屋の名前は「＊＊ラジオ商会」であった。しかし、同年３月21日の広告では、店名は「＊＊電機商会」に改称され「テレビ月賦販売　各メーカー高級テレビ　48,000円の品12ヶ月～15ヶ月　１ヶ月2,500円で扇風機・冷蔵庫・洗濯機の長期月賦も」とある。この広告が掲載された翌年３月に米川中

学校を卒業した就職者の初任給は8,000円前後であった。

大企業や繊維関係の事業所で働く卒業生の様子は、教員の職場訪問記から知ることできる。一方、個人経営の職場に就職した卒業生の様子は新聞に掲載された手記から知ることができる。米川新聞422号（1963.7.11）に、働きながら看護師をめざしている卒業生が寄稿している。彼女の職場は埼玉県の入院患者60人を収容する総合病院で、起床は6時半、直ぐに院長の自宅を掃除し、その後に寄宿舎の掃除、朝食を済ませ、8時半から勤務し、午後1時半から北埼玉医師会が設立した学校で学び、再び午後5時から6時まで勤務している。睡魔とたたかいながらの学業に苦労している様子を綴っている。

米川新聞471号（1964.4.21）には「新中卒者　集団輸送記」の題で集団就職の様子が教員から報告されている。1964年（昭和39）3月に米川中学校を卒業した就職者22人は、教員に引率されバスで新田駅まで行き、そこから夜行列車に取り換え、翌朝午前5時35分上野駅に到着した。上野駅では先発の同校教員の出迎えをうけ、上野公園に約500人が集まり激励を受け「それぞれの職安の担当者に引き取られ元気に散って行きました」とある。

「集団就職」の言葉が既に一般化した昭和38年度の米川中学校卒業生177人のうち、村に残り農業等に従事する家事従事者は14人（7.9%）であった。

米川新聞424号（1963.1.1）の「波紋」には「憂村生」の筆名で投稿がある。「今年も中学校の新しい卒業生が、先生方の斡旋で都会へ都会へと就職し村を離れて行こうとしている。まことに困った現象で農山村には人手がなくて今年の田植頃は一日五、六百円の日当になるだろう。そうしたら農家はとてもやってはゆけないと心配している……学校でも子供達に都会就職を奨める様にするばかりでなく……この村でも出来る産業を開拓せしめる様な技術をうえつけ……村から青年が離れない様検討されたいものです。これは学校当局だけの問題ではなく町当局としても検討する必要があると思います」

米川新聞484号（1964.9.11）は「老人の日に思う」の題で、「農村の人手不足現象はいわゆる三ちゃん農業という言葉が生まれる様に、農村を見捨てて、都会へ流れ去った若者の残していった農業をジイちゃん、バアちゃんが背負わなければならない現実」を嘆いている。

表3は東和町と宮城県の人口構成を示したものである。比較すると、東和町は10～19歳、20～29歳、30～39歳の働き盛りの年齢層の割合が、宮城県平均よりも低いことが数字からも確認できる。

表3　東和町・宮城県の10歳階級別人口構成比
――東和町（昭和36年1月1日現在）・宮城県（昭和35年国勢調査）から――

年　齢	東和町（人）（%）	宮城県（%）
0～ 9	3,200（22.3）	21.1
10～19	2,972（**20.7**）	**21.6**
20～29	1,802（**12.6**）	**16.2**
30～39	1,983（**13.8**）	**15.0**
40～49	1,499（10.5）	10.0
50～59	1,249（ 8.7）	7.9
60～69	979（ 6.8）	5.0
70～79	533（ 3.7）	2.5
80～	120（ 0.8）	0.6
	14,337	

出典：東和町の人口と人口構成比は米川新聞359号（1961年3月1日）「東和町の人口」から作成、宮城県の人口構成比は『本県の人口　昭和35年国勢調査結果』42頁から作成。

⑷　仙台湾地区の新産業都市指定と米川中学校卒の就職者

1962年（昭和37）に「新産業都市建設促進法」が成立した。新産業都市構想は大都市に人口と産業が過度に集中することを防止して、地域格差を是正し雇用の安定を確保するための地方拠点を作り出そうとするものである。1964年（昭和39）3月、宮城県では仙台市を含む太平洋沿岸の16市町村が、国から仙台湾地区新産業都市建設区域に指定された[52]。

同年10月11日発行の米川新聞487号には、米川中学校の進路指導係からの「中学生の就職に

ついて」と題する文が掲載されている。「就職先が本人、父兄、職安、学校の係によって決定される月を迎えました……尚本年からは地元優先という事が労働配分上、仙塩地区の新産業都市指定と関連して重点に挙げられ、（登米）郡内でも通勤八千円以上という基準が立てられています。町内の求人者も是非その線にご協力いただきたく、迫[53]職安に正式求人の手続きをお願いいたします……中学卒業後も一か年間は職業安定所を通じて就職することになっておりますので、この点もお忘れなく。来春の中学卒業生の給与は手取り8,500円から9,000円という処でしょう」この文は、米川中学校として職業安定所の意向を住民に伝えるものである。

しかし、次号では、中学校の就職担当者と推定され人物が本音を語っている。488号（1964.10.21）で「中学生の進路――就職の巻――」の特集が組まれ、匿名の参加者による座談会が掲載された。仙台地区の新産業都市指定が、県内の中卒者の就職に及ぼす影響については「実際の受け入れ態勢は未だ整っていません。給与も東京・東海に比べて千円以上低い事、子供達は県内は近すぎて敬遠する傾向」があると指摘している。

1964年（昭和39）年当時、米川中学校卒の就職者に影響を与えたのは、新産業都市指定ではなく東京オリンピックであった。1964年（昭和39）10月10日から24日まで東京オリンピックが開催された。東京オリンピック大会の２、３年前からオリンピック景気があった。しかし、職種によっては事業所の経営悪化がオリンピック開催前から始まり、1964年（昭和39）４月に就職した卒業生の事業所が、10月までに２か所倒産した。座談会参加者の一人は、「新卒の退職者が２、３人いるが、本人の働く意志が弱く」「どこでも働ける世の中なので、つい社会を甘く見ている傾向がみられます」と、退職理由のすべてを本人に求めている。卒業生の職場を訪問する教員は「宮城県の方はねばり強いから、是非来年も（卒業生を送ってほしい）」[54]という言葉を事業主から掛けられている。それゆえ、「ねばり強」くない者への評価が厳しくなるのであろう。就職者個人の資質と関係なく、景気変動に最初に翻弄されるのは中卒就職者であった。

おわりに

米川新聞の15年間にわたる発行期間中に、２度の町村合併があり、行政区域が広がっていった。そのたびに新聞名を変更して発行を継続したが、500号で終刊に至った。

終刊になった理由は、町村合併によって取材範囲が広がったこと、沼倉たまきの議会通信ともいうべき記事が361号（1961.3.21）で終了したこと等が要因となり、地域に密着した取材によって、読者の知りたいことを伝えるという米川新聞本来の方針から徐々に離れていったからであろう。米川新聞は沼倉たまきの議員生活の終わり（1965年５月14日）とほぼ時を同じくして終刊（終刊推定日1965年２月21日）になった。沼倉たまきの議員生活と共に、その歴史を刻んだ新聞であった。

米川新聞は沼倉たまきという女性議員が中心になり、しかし女性の視点や議員の視点に特化することなく中立な視点で、戦後復興期から高度経済成長期の時代に、東北の山村から地域と時代を観察した新聞であることにその意義がある。

今後の課題として、本稿では資料の存在が未確認のため言及できなかった次の２点が残されている。ひとつは創刊号と２号が確認されている米川村文化協会の会誌に関して、３号以降が確認されるならば、米川新聞創刊までの戦後５年間の村の状況と沼倉たまきの活動をより明らかにすることができる。もうひとつは米川新聞に関して、不明の終刊号が発見されるならば、沼倉たまきと新聞関係者が終刊を決断した理由を探り、その理由から米川新聞発行の意義を再考察したい。

［注］

（１）登米郡米川村誌編纂委員会『登米郡米川村誌』1955年、１頁
（２）米川新聞50号（1952.6.1）
（３）宮城県町村会『宮城県町村会七十年史』1992年、844頁
（４）矢嶋道文「旧伊達藩における隠れキリシタンとその現況――大籠地区（現岩手県東磐井郡藤沢町）と米川地区（現宮城県登米市東和町）における事例研究――」『関東学院大学キリスト教と文化研究所所報（2006年度）　キリスト教と文化』（第５号・通号５号、2007年３月）等。
（５）伊藤幹治「東北農村におけるキリスト教の受容」『国立民族学博物館研究報告』（11巻１号、1986年８月25日）45頁
（６）米川カトリック教会『身も魂も――米川カトリック教会創立25周年記念誌』1980年、43頁
（７）赤尾智宏「戦後日本の社会教育とキリスト教――宮城県登米市カトリック米川教会を事例に――」、同論文が未公開のため、引用は日本民俗学会談話会第856回の2010年度民俗学関係修士論文発表会での論文要旨による。
（８）沼倉研史氏提供の「嘉永元年有美堂書籍目録・江戸期蘭方医学の軌跡」（2017年４月２日洋学史研究会での発表資料）を参照。
（９）京城青葉会『青葉』第10号記念特別号、1993年４月25日、26頁
（10）拙稿「占領期における婦人教育政策の地域的展開――宮城県地域婦人団体の形成過程を事例に――」（『歴史』第98輯、2002年）、拙稿「占領期における「婦人」教育政策の地域的展開――岩手県の地域婦人団体を事例に――」（『地方史研究』309号、第54巻第３号、2004年６月）、拙稿「占領期における婦人教育政策の地域的展開――山形県婦人連盟存続の要因――」（『文化』第68巻第１・２号、2004年）
（11）高田満帆は1914年（大正３）に京城で生まれ、1937年（昭和12）東京女子高等師範学校を卒業し、釜山や京城の高等女学校で教職に就いた。戦後は宮城県の公立高校で家庭科教員として勤務した。2011年（平成23）死去。沼倉研史氏提供資料「偲ぶ草　沼倉満帆（旧姓高田）の生涯」（2011年）を参照。
（12）宮城県・みやぎの女性史研究会編著『みやぎの女性史』河北新報社、1999年、407頁
（13）金子幸子・黒田弘子・菅野則子・義江明子編『日本女性史大辞典』吉川弘文館、2008年、721頁
（14）沼倉たまきの生涯については、沼倉研史氏提供資料「故モニカ　沼倉たまき　偲び草」（1990年）を参照した。
（15）同６頁
（16）米川村文化協会『山』第２号、1946年12月30日、12頁
（17）1985年（昭和60）に日展会員に承認される。（『沼倉正見小品集』1997年、50頁）
（18）前掲（14）８～９頁
（19）1984年12月16日付朝日新聞宮城版「宮城風土記189　隠れキリシタンの里⑧」
（20）宮城県町村議会議長会『村の政治をよくするために婦人議員はかく考える』1955年11月、59頁
（21）前掲（19）
（22）米川新聞70号（1953.1.1）
（23）米川新聞の未確認号数は５部（27、57、142、184、201号）
（24）日高新聞の未確認号数は２部（213、215号）
（25）米川新聞の未確認号数は37部（273、280、299、300、338、400、405、407、413、420、433 ～ 436、440、444、446、447、450、454 ～ 456、458、463、486、489～500号）
（26）古文書の発見は米川新聞61号（1952.10.1）によると、1952年９月とある。この古文書は米川新聞75号、76号では「老聞並伝説記」と表記されている。2018年８月、東和町郷土史研究会顧問佐藤直喜氏に確認したところ、この古文書は所在不明とのこと。
（27）沼倉良之『洞窟が待っていた仙北隠れキリシタン物語』宝文堂、1991年、85～87頁
（28）同90～100頁
（29）前掲（６）３頁
（30）前掲（５）45頁、ただし米川新聞159号（1955.7.11）では７月10日の受洗者は184人で、その中で大人が38人、大多数が小中学生であった、と記している。
（31）前掲（６）11頁
（32）前掲（６）10頁、「集団洗礼」以後も信者数は増え、1980年８月15日発行の『身も魂も　米川カトリック教会創立25周年記念誌』「米川（大籠）教会洗礼名簿」には540人の記名がある。大籠教会は米川教会の巡回教会のため同一名簿になっている。
（33）前掲（５）45～46頁
（34）前掲（６）43頁
（35）米川聖マリア愛児園として開園し、仙台善き牧者修道女会が経営した。
（36）小林司教はカナダへ行き、各地で講演活動を行い、

米川に教会を建てるための寄付を集めた。
(37) ロザリオ会は毎週水曜日に信者宅で聖歌を歌い、神父の話を聞く会である。
(38)「浅沼事件」とは1960年10月12日に東京都千代田区にある日比谷公会堂で演説中の浅沼稲次郎日本社会党書記長が右翼の青年に刺殺された事件。平田浩神父は1958年（昭和33）6月米川カトリック教会助任司祭に就任。
(39) 島村泰三神父は1958年（昭和33）6月米川カトリック教会四代主任司祭に就任。
(40) ベルギー人村首ステファノ神父は1962年（昭和37）4月米川カトリック教会五代主任司祭に就任。
(41) 前掲（19）
(42)「家内安全」ではなく「国家安全」とある。
(43) 1961年に流行した歌謡曲「有難や節」の一節。
(44)『東和町史』1987年、472頁。『東和町史』では大篭と表記されているが、『藤沢町史本編　中』(1984年)では大籠と表記されている。本稿では大籠と表記する。
(45) 1われわれの世論を生かせ2郷土百年の大計をあやまるな3共有財産の適正保全を期せ4公共施設の拡充を。
(46) 岩手県藤沢町は2011年（平成23）に一関市に編入された。
(47) 前掲（3）521頁参照。
(48) 前掲（3）508～512頁参照。
(49) 前掲（3）521頁参照。
(50) 前掲（13）99頁参照。
(51) 米川中学校記念碑建立実行委員会『米川中学校記念碑建立記念誌　青春の碑』1984年、3頁
(52)『仙台市史　現代Ⅰ』2011年、156頁
(53) 宮城県登米郡迫町
(54) 米川新聞437号（1964. 6. 11）

付記

本稿執筆に際し、沼倉研史様、畠山益子様から貴重な資料の御提供と御教示をいただきました。記して御礼申し上げます。